

樹皮採食要因の解明

船越美穂

対応者：渡邊邦夫

宮島にて新たに調査を始めることはしなかった。新たな研究協力者と共に、1997年から調査を行ってきた現・松本市、安曇野市に生息する野生ニホンザルを対象に採食要因の検討を行った。

現・松本市、安曇野市に生息する野生ニホンザルは冬期にシナノザサの葉身を採食する。と言っても葉身の全ての部分を食べるわけではなく、食べる部分と食べない部分がある。食べる部分と食べない部分に分けて栄養分析を行ったところ、食べない部分で繊維分が多いことが分かった。硬さの分析を共同研究者である霊長類研究所形態進化部門の清水大輔氏が行ったところ、食べない部分の方が硬いことがわかった。

今後、現・松本市、安曇野市に生息する野生ニホンザルを対象にシナノザサの葉身と同じ方法によってカラマツ内樹皮とアカマツ内樹皮の採食要因を解明してゆきたい。

19 サル類骨密度に関する比較動物学的研究

田中愼（国立長寿医療センター・加齢動物育成室）

対応者：鈴木樹理

京都大学霊長類研究所所蔵の、年齢や性の異なるニホンザル（霊長類研究所年報, 36, 2006, pp111 参照）の右側大腿骨の晒骨標本の貸し出しを受け、DXA法（DCS-600EX-IIIR, ALOKA）で骨塩量と骨面積を測定し、骨密度を得た（同上参照）。しかしながら、コモンマーマセット（日本クレア）やカニクイザル（基盤研）の測定結果と比較すると、全く能わないことが判明した。そこで単離骨の特性をいかし、ラットの下顎骨で亜系統差を有効に検出した、骨塩率（BMR: bone mineral ratio, Exp. Anim., 55, 415-418, 2006）による比較を試み、種差や年齢差を捉えつつある。

20

松山隆美、永井拓（鹿児島大・感染防御・免疫病態制御）

対応者：中村伸

18年度はカニクイザルの試料提供が無かった。その為、本研究は未実施となった。

21 ボノボの社会生態に関する研究

田代靖子（（株）林原生物化学研究所・類人猿研究センター）

対応者：杉浦秀樹

コンゴ民主共和国ワンバ森林のボノボは、約30年にわたって調査の対象となり個体識別に基づいた調査がおこなわれてきた。しかし、内戦による混乱で当時コドモだったオス個体の識別ができず、現在群れにいるオスの由来がわからなくなっている。ボノボの社会学的な研究をおこなう上で血縁関係は必須の情報であり、内戦前のデータを活かすためにも、個体名の確認が必要である。本研究では、特定部位の塩基配列を以前得られた結果と比較することにより、個体名を明らかにすることを目的とした。

今年度は2005年に採集した非侵襲的試料を分析した。糞と尿からDNAを抽出し、ミトコンドリアDNAのd-loop領域の増幅とシーケンスを行った。これまでに数個体の親子（母-息子）関係は推定できていたため、まだ試料が収集できていなかった個体について分析したが、DNAの増幅ができず、個体名の推定ができなかった。一方、内戦前には対象群に所属していなかったメスの目的部位塩基配列を確定できた。

今後、親子関係の推定ができていない個体について試料を採集し、分析を行う必要がある。また、現在の群れ構成メンバーについて、目的部位の塩基配列を再確認し、対象群の基礎資料としたい。

22 飼育下チンパンジーにおける放飼場内植物の採食利用の状況把握

川地由里奈（中部大・院・応用生物）

対応者：友永雅己

京都大学霊長類研究所で飼育されているチンパンジーにおいて、屋外放飼場に生育している木本類、草本類を採食していることが確認されている（竹元ら 1996, Ochiai and Matsuzawa 1998）。しかし、実際に彼らがどのように利用しているのかといった採食利用状況の詳細についてはよく分かっていない。栄養が給餌で充足していると考えられる飼育下チンパンジーの植生利用を調べることで採食行動の多様な機能を明らかにできると考えられる。そこで、本研究では直接観察、食痕調査を通して放飼場内植物の採食の実態調査をおこなった。その結果、採食頻度は、パル、ボボ、プチの順に多かった。採食植物種数はパル、アユム、プチの順に多かった。このように、様々な年齢の個体が採食をおこなっていた。また、ボボ、プチの採食回数は他個体と行動を共にしているときより1個体でいるときの方が多かった。また、